

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02524

研究課題名（和文）アンドレ・マルローとフランス国民の記憶

研究課題名（英文）Andre Malraux and French collective memory

研究代表者

竹内 修一（TAKEUCHI, SHUICHI）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：40345244

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：フランス第五共和国成立以降、ド・ゴール大統領は、国民同士が殺し合ったアルジェリア戦争を忘却させ、第二次大戦中のドイツに対する抵抗こそ共和国国民の起源はあるのだというレジスタンス神話によって、国民の記憶を形成しようとした。そのさい重要な役割を果たしたのが、初代文化大臣をつとめた作家アンドレ・マルローである。本研究は、彼が企画・実施したセレモニーや演説、発言等を調査して、現在のフランス国民の集合的記憶の形成に、マルローがどのような役割を果たしたのかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アルジェリア戦争で混乱する時代にドゴール將軍によって創出されたフランス第五共和国において、初代の文化大臣である作家アンドレ・マルローが、どのようにフランス人全員に共通する過去の記憶を作り出したのか、どのようにその記憶を国民に共有させるに至ったのかを、明らかにした。この研究成果は、昨今活況を示している集合的記憶の研究、所謂メモリー・スタディーズへ貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：Since the establishment of the Fifth Republic of France, President De Gaulle has obliterated the Algerian War, where the people have killed each other, and formed the Resistance Myth that the resistance during World War II is the origin of the people of the Republic. At that time, Andre Malraux, who was the first Minister of Culture, played an important role. This research investigated the ceremonies, speeches, and remarks that he planned and conducted, and examined what role Marleau played in the formation of the collective memory of the present French people.

研究分野：フランス文学・思想

キーワード：マルロー 集合的記憶 ジャン・ムーラン パンテオン

1. 研究開始当初の背景

『記憶の場』という大部の書物が出版されてから、すでに20年以上経過した。しかしわれわれは今なお、ピエール・ノラの言う「コメモラシオンの時代」を生きている。たとえばフランスでは、国民の祝日である革命記念日には、毎年、大統領の臨席の下、国家のセレモニーが大々的に行われるし、二つの大戦の戦勝記念日には、テレビは競うように戦時中の映像を流す。2014年6月に、連合国のノルマンディー上陸70周年を記念して連合国の首脳のみならずドイツの首相を招いてのセレモニーが行われたことも記憶に新しい。2015年5月に行われた四名のパンテオン葬もまた、共和国の偉人を思い起こし顕彰する、コメモラシオンの儀式としてとらえることができる。フランス文学研究という狭い分野に於いても、カミュ生誕100周年、バルト生誕100周年を記念するシンポジウムや講演会が各地で開催されたのは周知のとおりである。

言うまでもないことであるが、この「コメモラシオンの時代」は、フランスだけではなく、わが国を含めた世界全体に見られるもの、言わばグローバルな現象になってきている。そのことを象徴するのが、世界遺産、あるいは世界記憶遺産(Memory of the world)という国連の事業であろう。人類が未来に伝えてゆくべき「記憶」に関連する資料が、毎年新たに認定される世界記憶遺産には、フランスからは、早い時期に「人権宣言」が登録されている。わが国に関して言えば、2011年には山本作兵衛による筑豊炭鉱の記録画が、2013年には、慶長遣欧使節関係資料が登録された。しかし最近の「南京大虐殺」や「シベリア抑留」の登録が示すように、人類の公的な「記憶」への登録は、各国間のかけひきを伴う、きわめて政治的な事柄である。

ところで、フランスに於いて、国民のコメモラシオンの事業を推進し、また他方で、国連の世界遺産事業の創始にきっかけを与えた人物がいる。『希望』や『人間の条件』の作家、アンドレ・マルローである。第五共和国成立後、初代文化大臣をつとめたマルローは、アスワンハイダムの建設のためにナイル川に沈もうとしていたアブシンベル宮殿を救うことを、ユネスコで訴える。これが世界遺産の創設につながるのである。その一方で、マルローはフランス国内で様々なコメモラシオンの行事を行い、第五共和国初期の「記憶政策」を担ったのである。本研究の目的は、マルローがどのような記憶を呼び起こして、アルジェリア戦争のあと分裂していたフランス国民のアイデンティティをふたたび確立しようとしたのかを検証することである。ドゴール主義者としてのマルローが、ドゴールや第二次大戦に関連する「記憶」をどのようにフランス国民に共有させようとしたのかを探ってみたい。

集会的記憶をめぐる研究、所謂メモリー・スタディーズが昨今活況を呈していることは周知のとおりである。雑誌『思想』の2015年8月号のテーマはまさしく「想起の文化 戦争の記憶を問い直す」であった。2011年には、ピエール・ノラの仕事を批判的に継承した『東アジアの記憶の場』(河出書房新社)という研究書がわが国でも出版されている。フランスの『記憶の場』が一国だけのナショナルな記憶を問題にしているのに対し、『東アジアの記憶の場』は「桜」や「運動会」や「力道山」がどのように記憶されてきたのかを、わが国のみならず中国、韓国そして台湾を通して、論述している。フランスで行われた研究としては、『記憶の統治 フランスに於ける記憶の政治学』(Johann Michel, *Gouverner les Mémoires, les politiques mémorielles en France*, PUF, 2010)をあげておく。そこで著者は、王制の時代から大革命を経て近年に至るまでのフランスに於ける「記憶の政治学」を俯瞰し、かつてコメモラシオンは「国民の統一」を目的としていたが、近年(1990年代以降)の記念行事は、ホロコーストや植民地政策、奴隷制度などの犠牲者の「記憶」へと重心を移していることを指摘している。アンドレ・マルローがフランス国民の集会的記憶に及ぼした作用を見極めようとする本研究は、こうしたメモリー・スタディーズに対して、フランス文学/思想の研究者の側から、貢献しようとするものである。

2. 研究の目的

フランス第五共和国成立以降、ド・ゴール大統領は、国民同士が殺し合ったアルジェリア戦争を忘却させ、第二次大戦中のドイツに対する抵抗にこそ共和国国民の起源はあるのだというレジスタンス神話によって、国民の記憶を形成しようとした。そのさい重要な役割を果たしたのが、初代文化大臣をつとめた作家アンドレ・マルローである。本研究は、彼が企画・実施したセレモニーや演説、発言等を調査して、現在のフランス国民の集会的記憶の形成に、マルローがどのような役割を果たしたのかを見極めようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、次の二つのステップからなる。第一に、マルローの活動を実証的に調査し、彼が企画したセレモニーがどのようなものであったのか、彼の発言や演説は如何なるものであったのか、そして当時のメディアはどのように報道したのかを明らかにする。第二に、集会的記憶をめぐる理論的・歴史的な考察によって、そのようなマルローの活動を分析し、フランス国民の集会的記憶の形成に果たした彼の役割を見極める。

4. 研究成果

(1)第二次大戦中にフランス国内レジスタンスを統一した指導者であるジャン・ムーランは、1943年にゲシュタポに捕らえられて拷問を受けた後に死亡した。彼は日本ではほとんど知られていない人物であるが、現在のフランスでは圧倒的な知名度を誇る。ムーランの知名度が高まるきっかけを作ったのが、フランス共和国の偉人廟であるパンテオンへのジャン・ムーランの遺灰(棺)の移葬である。1964年12月19日に行われたセレモニーに於いて、文化担当大臣アンドレ・マルローが、追悼演説を行った。二十世紀最高の追悼演説とも言われるこの日の演説を知らないフランス人はいない、と言っても過言ではない。

マルローの演説のテキストの内容と形式、および当日の様子を記録したビデオを分析し、本研究代表者は、この演説とセレモニーが言わば「世俗のミサ」であることを明らかにした。すなわち、マルローがキリストの物語を下敷きにして、ムーランの活動を描いていること、この演説の効果として、フランス国民にとってムーランが、「三人称の死者」から「二人称の死者」へと変貌することを明らかにした。この演説こそが、フランス人は皆ドイツに抵抗したのだという、所謂レジスタンス神話(フランス人の集合的記憶)の形成に大きく貢献したのである。

(2)マルローによるムーランの追悼演説には、複数の草稿が残されているが、そのうち重要なものがフランス国立図書館に所蔵されている手書き原稿、そしてアンヴァリッド内のフランス解放博物館に所蔵されているタイプ原稿である。

これらの原稿を詳細に調査した結果、手稿の段階からタイプ原稿に至るまでに、演説の構成上の大きな変化、および暗黙のうちに聖書を参照する箇所が増えていることが確認できた。演説後半部で、いきなり命令法「見よ」を用いて、聴衆に戦時下のレジスタンスの「蜂起」を追体験させる箇所は、キリスト教の「復活」のイメージに重ね合わせられているが、この箇所は、最初の手稿には存在せず、タイプ原稿ではじめてあらわれることが明らかになった。また「ユダヤ人の王」として処刑されたキリストに重ねられるムーランの呼称「哀れな王」、「天使」を思わせる「パラシュート」、「地獄」を想起させる「地下室」等も手稿には存在せず、タイプ原稿ではじめてあらわれることが確認された。こうした研究成果は、2019年11月に近畿大学で開催された日本フランス語フランス文学会秋期大会において発表した。

(3)マルローそのひとの文化政策が、二十世紀後半に再び注目されることがあった。ドゴール大統領時代の文化大臣を、ドゴール主義者の大統領ジャック・シラクがパンテオンに移葬したのである。当日のセレモニーや大統領の演説を分析することによって、本研究代表者は、この人選はドゴール主義者としてのシラクの政治的正統性を誇示するものであると同時に、マルローの文化政策の継続を宣言するものであることを明らかにした。

シラク大統領の演説では、マルローこそが「右でも左でもなくフランスの」真のドゴール主義を体現していたのだと讃えられるが、とりわけ強調されるのはフランス人に「文化遺産」の価値を自覚させた大臣としての功績である。マルローの政策を継続する「約束 engagement」を繰り返すシラクの演説は、彼の治世の施政方針演説として読むことができるのである。

(4)2002年11月30日に、シラクは、『三銃士』で知られる作家アレクサンドル・デュマをパンテオンに入れた。このことは、マルローが形成に寄与した「フランス国民の集合的記憶」に変更をもたらすものであることを明らかにした。

デュマを讃えるシラクの演説で強調されるのは、この作家が国民共通の「想像界 imaginaire」を創造したことである。フランス人の誰もが、小さい頃、『三銃士』を読みながら、リシュリューに対抗して王妃を守るダルタニャンや三銃士たちであった。この読書の記憶こそがフランス人が自分たちの歴史、自分たちの過去を思い出すための「酵母 levain」なのだと大統領は言う。他方で、シラクはデュマが黒人の血を引いていたことに言及し、同時代のフランス人たちが作家の相貌を誹謗していたことに対して、謝罪を行う。この謝罪は、そしてハイチの黒人奴隷の血を引く者をフランス共和国の神殿に入れるという象徴的行為は、国内で決して無視することができなくなった、植民地出身者およびその子孫に対する融和の呼びかけであったのだ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 竹内修一	4. 巻 155
2. 論文標題 アンドレ・マルロー 「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」 第五共和国のコメモラシオン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北大文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 55-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竹内修一	4. 巻 52
2. 論文標題 黒い血と青い血 アレクサンドル・デュマのパンテオン葬	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究（東京大学仏語仏文学研究会）	6. 最初と最後の頁 197-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹内修一
2. 発表標題 フランス共和国は誰を神にするのか？ アレクサンドル・デュマとパンテオン
3. 学会等名 アリアンス・フランセーズ札幌「フランス・アラカルト・セミナー」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内修一
2. 発表標題 アンドレ・マルローとアレクサンドル・デュマのパンテオン葬
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「パンテオンと作家たち」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内修一
2. 発表標題 アンドレ・マルローのパンテオン (1964 / 1996)
3. 学会等名 講演 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 竹内修一
2. 発表標題 アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」について 手稿、タイプ原稿から見えてくるもの
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会秋期大会 (近畿大学)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 シモーヌ・ヴェイユ、アルベール・カミュ、竹内修一ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 293
3. 書名 シモーヌ・ヴェイユ《別冊水声通信》	

1. 著者名 田山忠行 (編著) 竹内修一ほか	4. 発行年 2016年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 261
3. 書名 空間に遊ぶ 人文科学の空間論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----